

昭和戦中期の軽音楽に関する一考察

— カルア・カマアイナスについて —

古川隆久

はじめに

1939 (昭和14) 年夏に結成され、1940 (昭和15) 年10月に第1回公演を行ない、43年6月の第7回公演の直後に解散したハワイアンバンド、カルア・カマアイナス (南海楽友とも称した。以下、適宜カルアと略称) は、昭和戦中期の軽音楽¹⁾ 史上、きわめて特異な楽団である。アマチュアバンドでありながら、日比谷公会堂という、当時の東京で最も著名な音楽専用ホールで単独の定期公演を2年余りにわたって行い、大手レコード会社から多数のレコードが市販されるなど、この種のバンドとしてはかなり高い人気を得ただけでなく、主要メンバーの多くが華族など上流階層の師弟だったのである。

カルアは、戦前、戦中の軽音楽史を対象とする文献にはしばしば登場する。しかし、その中でカルアの成立事情や活動についてある程度まとまった記述があるのは、早津敏彦『日本ハワイ音楽・舞踊史』のみであるが²⁾、その評価は「戦時下音楽団体の受難史を集約している」というものである。そのほか、瀬川昌久は、カルアを当時における「アマ出身のハワイアン・バンド」の「筆頭」とし、オリジナル曲に注目して、「ハイレベルの和製ポピュラー・ソングを世に出した功績は大きい」³⁾ とし、細川周平は、やはりカルアのオリジナル曲に注目し、「健全な若者の歌」すなわち「ほがらかソング」の系譜の「戦前の終着点」と評価している⁴⁾。要するに、従来の研究は、このようなバンドがなぜ昭和戦中期に登場し、人気を得たのかについて十分に考察しているとはいえない⁵⁾。

そこで、本論文では、カルアが人気を得た要因を、成立過程や活動実態のみならず社会的文化的背景もふまえて考察することで、当該期の歴史像を深める一助としたい。

小生は、2002 (平成14) 年に別の関心から行なった聞き取り調査で偶然このバンドのことを知り⁶⁾、それを契機に、本バンドの主要メンバーの一人であった原田敬策の回想⁷⁾ という、新史料に接する機会を得た。さらに近年、本バンドの演奏録音がコンパクトディスクとして復刻され、市販されている⁸⁾。また、その後の調査で、公演のプログラム (史料1～8として本文末尾に掲載) の他、従来使われていない史料を見つけることができた。本論文では、これらの資史料を用いて論を進める。

1. バンドの成立過程

カルア・カマアイナスの創始者で、リーダーともなったのは、スチールギター及び木琴奏者の朝吹英一である。スチールギターはハワイで生れた楽器で、スライド奏法という19世紀末以降にハワイで生れたギター奏法を用いる際に、音量を増すため、楽器の一部や弦を鉄製にした楽器で、1930年代初めからは、電気を使って音を増幅するエレクトリック・スチールギターが主流となっていた⁹⁾。

朝吹は、1909（明治42）年に朝吹常吉の長男として東京で生れた。父常吉は三井物産を皮切りに帝国生命、三越の社長を歴任した財界人で、祖父英二は三井財閥の幹部を経て財界の大物となった人物である。当然のことながら朝吹家は裕福で、家庭生活は、イギリス留学の経験を持つ常吉の方針により、夕食時の会話は英語と決められていたほどの西洋趣味で、翻訳家として著名な登水子を含む5人の子供はいずれも西洋楽器が演奏できた¹⁰⁾。

英一は幼い頃に木琴を買い与えられて熱中した末にプロ級の腕前となり、慶応義塾大学経済学部を卒業して三菱信託の社員（のち三菱系の商社千代田組の役員）となったあとも、木琴奏者としてNHKのラジオ放送に1927（昭和2年）から出演し、30年にアメリカで音楽を学んだあとは、大手レコード会社各社からレコードを出すなど¹¹⁾、プロに準じる音楽活動をしていた。朝吹は、スチールギターを弾くようになった経緯を、戦後、次のように回想している（〔 〕は原注、〔 〕は引用者注¹²⁾）。

その頃、SG〔スチールギター〕に興味をもち始めた社〔三井信託〕の先輩N氏は、斯界の名手、ビクターの灰田晴彦氏に師事せんとして、当時、同じビクターに木琴の独奏をしばしば吹き込んでいた私〔朝吹〕に、灰田氏の紹介を求められた。

私は灰田氏には面識がなかったが、N氏を同伴、ビクターのスタジオに赴き、社員を通じて面会を求めると、灰田氏は快く我々を引見され、愛用のリッケンバック棒型電気ギターを持ち出して、いろいろ演奏してみせて下さった。私は、その美しい音色とフェーキング〔即興演奏〕の妙趣にすっかり魅せられ〔中略〕遂に〔昭12〕三月からN氏と共に毎週土曜日の午後、杉並区高円寺の灰田邸に通うことになった。〔中略〕

昭和一四年〔一九三九〕四月八日に、灰田氏門下生の研究発表会が神田のYMCAで行なわれ、私は処女演奏として、モアナ・グリークラブの伴奏で、「ハノハノ・ハナレイ」や「カマアーイナ」などをやった。〔中略〕

要するに、朝吹は、1937年3月に、ギター奏者灰田晴彦（のち有紀彦）に弟子入りし、スチールギターを学び始めたのである。その背景として、軽音楽の世界におけるハワイ音楽の世界的な流行があった。スチールギターやウクレレを主な楽器とするハワイ音楽（ハワイアン）は19世紀末から発達し、ハワイの音楽家たちはアメリカやアジア周辺に進出し、これら各地の大衆音楽に大きな影響を与えた。日本においても大正末から流入し始め、昭和初期にはジャズにつぐ外来系大衆音楽としての地位を確立していた¹³⁾。

1941年夏の段階で、「夏になると毎年の様にどのレコード会社もハワイ音楽のレコードをアルバムにして出す事が習慣になつてゐる。そしてこのハワイの音楽は日本人にも広く愛好される素質を持つてゐるので、レコードは盛んに売れる」と言われる状況であった¹⁴⁾。さらに、スチールギターは流行歌でもしばしば用いられたので¹⁵⁾、電気増幅やスライド奏法による独特の音色は、1930年代後半までには広く知られていたと考えられる。

灰田晴彦は、ハワイアン及び流行歌（歌謡曲）歌手として著名な灰田勝彦の兄である。灰田兄弟はハワイの日系二世で、日本に里帰り中にパスポートを盗まれたため日本で大学に進学、1929年に晴彦が学生軽音楽バンド、モアナ・グリークラブを設立、晴彦も参加した。晴彦、勝彦の兄弟はハワイアンの流行に乗って35年ごろからプロとなり、特に晴彦はスチールギターの演奏だけでなく作曲や編曲でも活躍し、日本におけるハワイアンの第一任者となった。勝彦は1930年代中ごろからハワイアンだけでなく流行歌の歌手としても広く名を知られる存在となった。晴彦はギターの教習所を設けるにいたり、そこには一流企業の会社員や、近衛文麿の娘、金子堅太郎の孫なども通っていた¹⁶⁾。

日本にハワイアンを演奏したいという人が現れてきた背景について、早津は「外国文化に接する機会が多く、素直に受け入れて違和感や抵抗を持たぬ者、高価な楽器を買って演奏する暇や場所のある者といえ、いわゆるエリート階級に限定されるのは当然だろう」¹⁷⁾と考察している。ただし、1940年ごろになると、「学生でもスティールやギターを志す者が激増してアマ出身のハワイアンバンドによるリサイタルが頻繁に開かれた」¹⁸⁾ように、ハワイアンの演奏は一部の人々だけの特権ではなくなっていく。輸入品のスチールギターは300円もしたが、比較的安価な国産品も登場したこと¹⁹⁾や、戦時景気で一時的に裕福になった人が少なからず現れたことがその要因として考えられる。

さて、カルア結成の経緯について、朝吹は次のように回想している²⁰⁾。

昭和十三年に、軽井沢で原田さんに会って、ウクレレが上手なので一緒にハワイアンをやろうということになった。秋頃から芝小路さんも見え、当時は会社の勤めがあるので、土曜日の夜集まって、「サタディ・ハワイアンズ」という名で練習を始めたんですね。そして十四年夏に、これも軽井沢で、朝比奈さんと知り合い、是非教えてくれ、というので、ウクレレ、サイド・ギター、スティールと全部初歩から彼はやり出したんです。こうして翌十五年夏に、この四人のメンバーで「カルア・カマアイナス」というのを作りました。

原田とは原田敬策のことである。1919（大正8）年、男爵貴族院議員原田熊雄の長男として生れた²¹⁾。父熊男は周知のように大正末から元老西園寺公望の秘書をつとめた。原田は、学習院中等科1年または3年の頃（1932または34年）に「当時ハワイに別荘を持っていた従姉の有島暁子からウクレレを土産にもらった」ことから、「銀座の楽器店で二週間速成という教則本を五十銭で買い、独習に熱中した。とはいえ、オタマジャクシは全然ダメ、という習う気もしない。そこでメロディーはレコードで覚え、歌詞とコード〔和声のパターン〕

だけ楽譜に頼]ったという²²⁾。有島暁子は、画家有島生馬(小説家有島武郎の弟、本名壬生馬)の娘で、母が原田熊雄の妹にあたる。生馬の父武が十五銀行、日本郵船、日本鉄道などの社長を歴任して財を成した²³⁾関係上、裕福な環境にあったのである。

朝吹との出会いは、「その頃わが家では、未だ小さかった弟を除けば、姉二人と私はテニスに夢中になっており、夏は国際色豊かなテニスのメッカ軽井沢で過し、「朝吹邸のコートにもよくお邪魔した」。そこで朝吹英一と仲良くなり、「思いがけなく、お互いに共通の趣味があることがわかり」²⁴⁾、つまり、テニスを通して知り合ったのである。いうまでもなく、テニスは当時日本の上流階級に最も好まれていたスポーツである。

芝小路は1920年生まれで男爵家の長男。父豊俊は陸軍大佐を経て靖国神社の禰宜を勤めていた。芝小路は学習院で原田の同級生で、テニス部の仲間だった。物まねがうまかったことから原田に誘われて歌やギターを始め、学習院中等科5年の時、学園祭で2人でハワイアンを演奏して教師に怒られたという²⁵⁾。朝比奈は1911年大連生まれで、慶応義塾大学経済学部を朝吹と同期で卒業後、朝吹と同じ千代田組に勤務していた。本人の実家は比較的裕福だった²⁶⁾。

その後、「次第に腕が上るにつれ聊か野心が出て来て、人に聴かせようではないかと」²⁷⁾なり、カルア結成、第1回公演となった。「カルア」はハワイの地名、「カマアイナス」はハワイの言葉(ポリネシア語)で「土地の人」あるいは「昔なじみ」の意である²⁸⁾。

カルアの第1回公演は1940年10月12日に行われた。公演の詳細は史料1を参照されたい²⁹⁾。会場の産業組合中央会館は国鉄有楽町駅前にあり³⁰⁾、客席は300だったが、通路まで埋まる盛況ぶりだった³¹⁾。入場料は税込み1円となっているが、当時、クラシックや軽音楽のプロの演奏会の入場料は2円から3円なので、アマチュアとして特に高額とはいえない。出演者には、創立メンバーの他、中山鋼一郎という名が見えるが、創立メンバーにベース奏者がいないので、おそらく中山はベース奏者で、4人のうちのいずれかの友人と考えられる。彼らは「ユニフォームは純白のジャケットにブルーのワイシャツ、白ネクタイ、紺色のズボンに黒靴、赤いレイといったスタイル」³²⁾で舞台に立った。

曲目は、ハワイの有名作曲家によるハワイアン³³⁾を主体とし、朝吹や灰田晴彦によるハワイアン風のオリジナル曲³⁴⁾、そしてジャズのスタンダード曲(「アレクサンダーズ ラグタイム バンド」となっている。歌詞は、朝吹のオリジナル曲を含めてすべて英語で、聴衆にも歌詞集を配布して一緒に歌った³⁵⁾。楽譜は、朝吹がアメリカの友人を通して入手していた³⁶⁾。プログラム裏面には「御同好の方は何卒下記へ御照会下さい」として朝比奈の自宅が記されている。朝比奈が楽団のマネージャーを務めていたことと、演奏仲間や継続的な聴衆を集めようとしていたことがわかる。

第2回公演は41年1月25日に同じ場所で行われた(史料2)。曲目の傾向は第1回とほぼ同じである。今回は出演者が多いが、このうちベース奏者の東郷安正は以後中核メンバーとなる。

東郷は1915年生まれ。財界出身の貴族院男爵議員東郷安の長男で、学習院高等科を卒業後、東京工業大学を経て日本電気に勤めていた。学習院時代から学習院管弦楽団のコントラバス奏者およびアマチュアのジャズベース奏者として活動しており、就職してからも、太平洋戦争末期まで夜はほぼ毎日練習か公演で演奏していた³⁷⁾。

以後、朝吹、原田、朝比奈、芝小路、東郷の5人が中核メンバーとなり、カルアは、日比谷公会堂での定期公演やレコード録音など、本格的な活動を始めることとなる。

2. 日中戦争期

以下、活動の概要については、史料3～8と添付資料1、2を主に使ってみていく³⁸⁾が、太平洋戦争開戦を境に変化が見られるので、2つの時期に分けて検討していく。

第2回公演からまもなく、レコード録音の話が持ち上がり、41年5月に2曲の録音が行われた。いずれも歌詞は日本語、うち1曲は朝吹のオリジナル曲で、レコードは流行歌と同じ日本盤の扱いで8月新譜として7月20日に発売された。朝比奈がレコード店(京橋堂)の主人を通じてコロムビアのレコード制作担当者丸尾芳蔵と知り合い、丸尾が彼らの練習を聴いてレコードデビューを決め、「天にも上るような気持ちで嬉しかった」という³⁹⁾。カルアがすでに商業レコードを出せるほどの技量と音楽性を備えていたことがわかる。

レコードを出すことになったからという朝比奈の提案⁴⁰⁾で、レコード発売に先立つ6月28日、第3回公演が日比谷公会堂で行なわれた。日比谷公会堂は客席数約3000、新交響楽団(現在のNHK交響楽団)の本拠地で、外来有名クラシック演奏家の公演会場ともなる、当時東京で最も権威あるホールであった。客席数が産業組合中央会館の10倍という条件での公演には危惧するメンバーが多かったが、結果的には満席で大成功となった⁴¹⁾。

この公演の特徴は、単に日比谷公会堂を会場としたというだけでなく、「定期公演」と銘打ち、プログラムの表紙にコロムビアレコードの商標が刷り込まれ、レコードの発売予告がなされ、さらに、「南海音楽同好会」という後援組織が作られ、会員募集の告知が以後のプログラムに載せられていくことである(史料3～6、8。なお、史料8にある会報は未見)。一連の動きは、レコード発売とタイアップしての動きだったのである。

その動機であるが、レコードを売りたいというレコード会社の意向もあったであろうが、カルアのメンバー自身は本業を持つか、学生でも比較的裕福な環境にいたので、経済的なものではありえず、「演奏は大勢の聴衆を前にしてこそ熱も入るし面白味もある」⁴²⁾という原田の発言に代表されるように、より活動を楽しみたいということだったと考えられる。

なお、後援会には若い女性が多数加入し、毎月1回メンバーとの会合が持たれ、会合の際には、やはり第3回公演プログラムから募集が確認できる「南海音楽講習会」(カルアのメンバーによる楽器講習会)の会員が演奏を披露することもあった⁴³⁾。

第3回公演の曲目(史料3)は、ハワイアンやジャズの他、朝吹の木琴独奏によるクラシックの小品(当時の概念ではこれも軽音楽である)や、戦時歌謡の「暁に祈る」も含まれ、レコー

ド発売予定の2曲が最後をかざった。開演に先立って、37年に内閣情報部が制定した「愛国行進曲」を演奏したらしい。その背景には、「私たちの周辺に憲兵や特高警察の圧力が何となく感じられるようになっていた」⁴⁴⁾ ことがあったようだ。それでも、今回の曲目の中で明らかに歌詞が日本語なのは「暁に祈る」と朝吹のオリジナル曲「陽炎もえて」で、その他は英語、または日本語と英語の両方で歌われたと推定できる⁴⁵⁾。

この公演を成功させたカルアは、以後、6月と11月に日比谷公会堂で定期公演を行なっていく。会員制度による定期公演は、新交響楽団が既に行っていたが、アマチュア軽音楽バンドの定期公演は管見の限り他にない。しかも、41年ごろからプロの軽音楽楽団による演奏会は日比谷公会堂でも盛んに行われるが、大部分は「軽音楽大会」などと銘打った複数の楽団による興行で、一楽団だけの単独公演は極めて珍しかった⁴⁶⁾。こうした事情は、カルアの人気がそれなりに高かったことや、カルアの技量と音楽性の高さを物語っている。

公演の客層は、後援会の中核メンバーであったと思われるデパートの若い女性店員たちもいたようだ⁴⁷⁾ が、原田の「若い人ばかりでなく、お嬢さんを連れのお母さん方も多く」⁴⁸⁾、あるいは「国際文化振興会会長の樺山愛輔伯爵や慶応義塾大学の小泉信三塾長などの姿もあった。南海楽友のコンサートは当時の東京の知識人に残された数少ない社交の場であったようだ」などという回想から⁴⁹⁾、高学歴者や上流の人々が主体であったと考えられる。管見の限り、メンバーの多くが上流階層出身者であることを明示した史料は見当たらないが、中心メンバーの出自が聴衆に広く知られていたことがうかがわれる。

さて、レコードの方であるが、コロムビアの新譜月報の8月号⁵⁰⁾では、「今、売り出しのカルア・カマイナスが、お馴染みの二曲を選んで、自信たつぷりに吹込んだもので、誰でも愉しめる、うつとりするやうな好演奏です。」と紹介されている。新譜の内容紹介は当該月の新譜のうちごく一部についてしか行われないので、カルアのレコードは同社としても自信を持って推薦できる商品とみなされていたことがわかる。実際、コンパクトディスクに複製された録音（前出）を聴く限り、素人にもわかるような音程やリズムの乱れはなく、当時のハワイの音楽家によるハワイアン演奏⁵¹⁾と比較しても遜色ない水準である。

カルアのレコード録音は、7月、9月にも行われ、7月の録音分は11月8日の第4回公演からまもない11月20日に発売された。原田の「町角や喫茶店で〔レコードの演奏が〕聞こえて来ると信じ難いような気持と嬉しさが錯綜したような気分になった」という回想⁵²⁾と共に、カルアのレコードの好評ぶりがわかる。ただし、9月の録音分は発売前に太平洋戦争の開戦を迎え、ハワイの作曲家の作品だったため発売中止となったが、その後もレコード制作は続けられていく。

また、オリジナル曲の楽譜の出版・販売も41年11月から始まり、43年3月までに14曲が発売された（史料5, 6, 8, 添付資料2）。一曲ごとの発売部数は、出版統制下においても初版が当初は各曲1500部、その後も1000部であり、それ以前はさらに多かったと推定できる。

このように、商業ベースでレコードや楽譜が連続して発売されていったことは、カルアの

活動が、友人知人だけでなく、広く不特定多数の人を対象にしたものとなっていたこと、つまり、カルアの人気アマチュアとしては異例の高さであったことを裏付けている。

なお、第4回公演は、日米開戦直前の公演であるが、ハワイの作曲家の作品が曲目の半数以上を占めた(史料4)。それらはやはり英語または両国語で歌われたと考えられる。

3. 太平洋戦争期

42年のカルアの活動で目立つのは、レコード録音が6回も行なわれた(うち1回は発売中止)ことである(添付資料1)。41年12月8日の太平洋戦争開戦と共に、ハワイアンを含め、軽音楽の楽曲の多くを提供していたアメリカ音楽の演奏や放送が禁止されたため、日本人の演奏による、日本製あるいは英米以外で作られた軽音楽の需要が一気に高まったことが背景にあることはいうまでもない。カルアの場合も、42年以後の定期公演の曲目は、すべてメンバーの作曲(作詞はメンバー以外の人の場合もあり)によるオリジナル曲か、日本及び英米以外の国の作曲家の作品で、歌詞もすべて日本語となった(史料5, 6, 8)。

6月の第5回公演から楽団名も「南海楽友」となった。カルア・カマアイナスはハワイの言葉であるから当然ではあるが、椰子の木に星空とカルアの英語表記をあしらった楽団のシンボルマークは今回から最後までプログラム表紙に刷り込まれており、42年11月の第6回公演のプログラム表紙には「カルア カマアイナス」という表記も併記されている。43年11月に政府が英語の使用を正式に禁止するまでは取り締まりが緩かったのである。

なお、第5回公演以後、出演メンバーに原田の名がないが、原田の回想から第7回公演に参加したことは明らかで⁵³⁾、第6回公演以後、芝小路が「芝幸二」という芸名で出演したことから、ウクレレの「田中健」が原田の芸名であると断定できる。

そのほか、この時期で重要なことは、41年末からはスチールギターの村上一徳が主要メンバーとして加わったことである。村上は1913年大連生まれ。父の仕事の関係で帰国し、成城学園に進んだ。1920年代末にハワイアンのレコードを聴いたことからハワイアンに興味を持ち、32年にモアナ・グリークラブの演奏会でスチールギターの奏法を知って弾くようになり、友人とバンドを結成した。

34年に神戸商科大学に進学すると、関西で学生バンド「サザンクロス・カレジアン」を結成してラジオ放送に出るなど活躍した。36年には渡米の機会があり、アメリカで活躍するハワイの音楽家たちや、ポール・ホワイトマン、ルイ・アームストロングなど当時の有力なジャズ音楽家たちの演奏を聴いたり、彼らに面会したりした。大学卒業後は東京で会社員をしながら活動し、39年には、ハワイの音楽家で編成された「ワイキキ・グラス・シャック・ボーイズ」というふれこみで、実際には日本人音楽家らとコロムビアレコードからスチールギター独奏によるジャズレコードを発売し、見事な演奏で好評を得ていた⁵⁴⁾。村上は、朝吹と同じく、アマチュアながらプロに準ずる音楽歴と技量の持ち主だったのである。

村上は、参加の経緯について、東郷から第2回公演の切符をもらって聴きにいった上で、

「〔41年〕一二月三日に、東郷氏の御紹介により、朝吹〔英一〕、朝比奈〔愛三〕両氏にお目にかかり、私も楽友の末席を汚すことになった」と回想している⁵⁵⁾ので、ジャズの仲間であった東郷の誘いによるものだったことがわかる。

42年6月20日の第5回公演は、村上が出演した最初の公演であるが、特筆すべきは、村上が独奏した第2部と、朝吹が木琴を独奏した第4部が、NHKにより海外に向けて中継放送されたことである(史料5)。当時、海外放送では、海外在留邦人の慰撫と、英米将兵の戦意喪失をねらって、日本人演奏家による軽音楽放送が盛んに行われていた⁵⁶⁾。アマチュアながらカルアも出演者に選ばれたのであり、やはりカルアの技量や音楽性がいかに高い評価を得ていたかがわかる。カルアは他にも何度か海外放送に出演していた⁵⁷⁾。

特に村上が作曲し、独奏を務めた「熱風」は、公演でも中継放送でも高い評価を得た。それは、同年11月の第6回公演でも再演されたこと、同曲のレコードはカルア初の洋楽盤扱いとなり、コロムビア(当時はニッタクに改称)の月報でも特に、「エル・チョクロと熱風の一枚は本邦の名楽団カルア・カマアイナスが熱演した洋楽デビュ盤、何卒御拝聴の程を」と強く推薦され、レコードの解説文にも⁵⁸⁾次のように書かれていることからわかる。

B面「熱風」は、村上一徳氏の作曲になる快速調のフォックス〔・トロット〕〔快速調のジャズ〕、極度の手法上の洗練性に加えて、全曲を貫く健全できびきびした曲趣は、我が軽音楽作曲界に新精神を鼓吹する呈のもので、非常に情新爽快な気合に満ちています。演奏はまた手際よく、呼吸の合った妙演であります。因みに本曲は、東京放送局より海外に向けて数回に及んで演奏され、異常な反響を呼んでいるものです。

洋楽盤となったということは、その演奏技術や音楽性が本場の演奏家に匹敵する水準であるとレコード会社が認めたことを意味する⁵⁹⁾。従来、日本人演奏の洋楽演奏が低く評価されてきた日本のレコード界⁶⁰⁾においては画期的なできごとであった。なお、洋楽盤となったためか、レコードの曲名表記は英語で、楽団名も「カルア カマアイナス」が使われた。

コロムビアは洋楽盤としての続編も制作する予定であった(史料5)。しかし、このころ音楽界では、「今なほジャズの演奏が後を絶たない〔中略〕「スイング」「ハワイヤン」の文字が平気で曲目に書かれる〔中略〕敵性音楽は当然斥けられなくてはならない〔中略〕米英は我等の敵である〔中略〕素人楽団のジャズは最も罪が深い⁶¹⁾」と、ジャズやハワイアン音楽への反感が高まっていた。さらに発売直前の1月中旬から、情報局の指示により、蛍の光など邦語歌詞で定着している一部の曲を除く英米人作曲の楽曲は、演奏のみならずレコードや楽譜の個人所有も禁止するという英米楽曲の一掃がはじまった⁶²⁾。そのため、このレコードへの批評は厳しいものとなった。

たとえば、『音楽之友』43年2月号(秩父保執筆)では、「日比谷で御馴染の「南海楽友」の〔洋盤〕デヴィュ盤であるが、これは困った一枚である。軽音楽の自粛が各方面に於て真面目に叫ばれてゐる折からこうしたレコードは慎むべきではないだらうか。表のタンゴはまだしも裏の「熱風」は純然たるスイング・トロットでスチール・ギターの使い方演奏態度も

又作曲技法も全々アメリカ的な受売りである。それに演奏もうまくない」と酷評され、『レコード文化』3月号(野川香文執筆)では、「この「熱風」は純粋なアメリカ風フォックス・トロットである。こう云ふものが内務省の検閲をパスしたと云ふのは実に珍妙」と評された。いずれもアメリカのジャズそのものであるからいけないというのである。そのためか、以後洋楽盤は制作されず、カルア自体がまもなく解散することもあって、邦楽盤も以後一枚のみとなる(添付資料1)。しかし、「熱風」は、当時から聴衆には好評だっただけでなく、戦後も日本で長く演奏され続けた⁶³⁾。カルアの活動は単に「健全な若者の歌」という評価では収まりきらない面があったのである。

その他、カルアの人気ぶりを示すものとして、第5回公演プログラムの「南海楽友ニュース」にある演奏会出演をめぐるトラブルがある(詳細は史料5参照)。カルアの出演が興行上有利となる、つまり客寄せになると考えられていたことがわかるからである。ただし、カルアとしては、「楽友は皆音楽以外の各自の本分に多忙なる為にこの定期公演の外は殆んど出演が不可能でございます」(史料5)と、アマチュアバンドであることを理由⁶⁴⁾に、定期公演以外に公開の場で演奏することはなかった。また、アマチュアであるということはプロよりも練習の時間が少ないことになるので、そのように公演の回数を精選しなければ演奏の質を維持向上することは難しかったと考えられる。

ただし、一度だけ例外があった。43年3月16日に日比谷公会堂で開催された「南方共楽園大音楽会」への出演である。これは、当時音楽界の統制団体であった日本音楽文化協会の国際音楽専門委員会が、情報局などの後援を得て開催した、国策色の濃い音楽会で、藤原歌劇団のオペラ歌手を中心とした四部構成であったが、第二部にカルアが出演し、東南アジアの音楽作品を日本語の歌詞をつけて演奏した(史料7)。出演にあたっては、「余りにも美しく過ぎる」という理由で、クラシック音楽評論家の園部三郎や作曲家の大木正夫らによってスチールギター演奏を中止させられたという⁶⁵⁾。

今回の出演は、平日の夜というだけでなく、国策色の濃い演奏会という意味でもきわめて特殊な事態であったが、その経緯を示す史料はなく、状況証拠から推測するほかない。最も可能性が高いのは、「熱風」のレコードの不評に驚いたコロムビア(ニッタク)が、今後もカルアのレコード発売を続けるため、カルアの名誉回復を図ろうと、この音楽会へのカルアの参加を日本音楽文化協会にはたらきかけたという筋書きである。これは演奏活動を続けたいカルアにとっても同意できる話だったはずである。

なお、注目すべきは、太平洋戦争期、抑留中のアメリカ大使グルーに朝吹邸で演奏を聞かせたことがあったことである。グルーは軽井沢で別荘が隣同士であったことから朝吹家と親しかった⁶⁶⁾。親英米派に近い人脈の中にカルアがおかれていたことがわかる。

同年6月12日、第7回定期公演が行われた。しかし、この直前、原田が海軍へ、芝小路が陸軍への召集が決まった⁶⁷⁾。主要メンバー二人の出征を控えたこの公演は感動的なものであった⁶⁸⁾。ただし、プログラム(史料8)を見ると、なお演奏活動を続ける意思がうかがえる。

しかし、2ヵ月後の8月、マネージャーをしていた朝比奈が退団したことから楽団は解散した⁶⁹⁾。朝比奈退団の理由について、断片的な手がかり⁷⁰⁾を基に推測すると、朝比奈が独立して軍需向けの鉄工所を設立、経営に乗り出して、演奏活動やマネージャー役の継続が困難になったためと考えるほかはない。

こうして、カルアの3年余りの活動は終わったが、翌年の4月には、スチールギター演奏やハワイアン風の編成による公開の場での演奏は日本音楽文化協会によって禁止された⁷¹⁾ので、いずれにしろまもなく活動は中止に追い込まれたはずである。

なお、カルアは敗戦直後、朝吹、原田、芝小路を中心にサーフライダースという名称で復活し、1952年ごろまで活動した⁷²⁾。

おわりに

以上、カルア・カマアイナスの活動の実態を明らかにし、そうした活動が実現した背景についても考察してきた。ハワイアン演奏家としては、プロとして数多くのレコードを出し、映画にも出演し、東京以外でも公演を行っていた灰田兄弟の方が人気も知名度が圧倒的に高かったことは疑いない。カルア自体、灰田らの影響の下に出発したのである。ただし、カルアがアマチュアとしては例外的に人気も知名度も高かったことも疑いない。

その原因として、第一に、太平洋戦争勃発により、主に英米の作品や演奏に頼っていた日本の軽音楽享受のあり方が変わらざるを得ず、日本人の作曲や演奏の需要が飛躍的に高まったことが指摘できるが、中でもカルアがプロに匹敵する人気を得た原因としては、プロに匹敵する技量や音楽性の高さがあげられる。そして、それが実現できたのは、彼らが公演や録音の数を精選することで演奏の質の維持向上を実現したためであった。

さらに、こうした現象のより大きな背景として、明治維新後始まった、小学校における西洋音楽を基本とした音楽教育の普及と定着を指摘しておきたい。流行歌の最初の全盛期が1930年代後半と考えられることと合わせ、カルアの登場と人気ぶりは、洋風の歌を歌ったり演奏したり聴いたりして楽しむことに違和感を持たなくなる世代がちょうどこのころ登場したことの一例でもあるのである。

史料1～8 カルア・カマアイナス(南海楽友)公演プログラム

凡例 ① 会場は、第2回までは産業組合中央会館、第3回以後は日比谷公会堂。②「南方共楽圏大音楽会」を除き、第3回以後は、プログラム表紙下に「後援 南海音楽同好会」の文字と、コロムビアレコード(第7回はニッチク)の商標が入る。③ 漢字は原則として新字に統一し、紙数の関係で段組は適宜変更した。〔 〕は古川の注記。同一人物の作詞・作曲が続く時は「同上」「同左」とした。④ 原本の所在については注29, 38参照。

史料1 カルア カマアイナス(第一回) ハワイの夕べ 会員券¥1.00〔1円〕(税共)

(〔昭和15年〕10月12日(土)午後6時半)

Part 1.

- I
1. Stars of Saturday Night Asabuki カルア カマアイナスの歌“土曜日の夜の星”
 2. South Sea Island Magic Iona 南海の神秘
 3. Little Heaven of the Seven Seas Scholl 七ツの海の天国
 4. Fragrant Lei Asabuki 薫る花環
 5. Honolulu How Do You Do Phelps 懐しのホノルル
- II
1. In the Royal Hawaiian Hotel Noble 青い小径
 2. Dancing under the Stars Owens 星の夜に踊る
 3. By an Old Sugar Mill in Hawaii Noble ハワイの砂糖小屋
 4. Little Stars in Hula Heaven Haida フラ天国の小星
 5. Alexander's Ragtime Band Berlin アレクサンダース ラグタイム バンド
(休憩)

Part 2.

- III
1. In a Little Hula Heaven Rainger フラの天国
 2. Lovely Night - Blooming Cereus Noble 美しき夜花
 3. What are the Wild Waves Saying Noble 波の囁き
 4. Cottage in the “Snow Valley” Asabuki カルア カマアイナスの家
- IV
1. Let's go for Broke Owens サア 楽しく行かう!
 2. It Happened at Waialae Owens ワイアライの出来事
 3. Rainbow in the Heaven Asabuki 歌の虹
 4. Haole Hula Anderson ハオレ フラ
 5. Palace in Paradise Owens 夢の宮殿
 6. Kamaaina Bright 古なじみ

演奏者 朝吹英一 朝比奈愛三 中山鋼一郎 原田敬策 芝小路豊和

御同好の方は何卒下記へ御照会下さい

カルア カマアイナス 大森区雪ヶ谷七五二 朝比奈愛三方(池上線雪ヶ谷駅下車)

史料2 カルア カマアイナス 第二回演奏会(昭和16年1月25日(土)午後6時半)

PROGRAM〔I～IVそれぞれにパート分担の記載があるが、紙面の都合上省略した〕

Part 1.

- I
1. Stars of the Saturday Night Asabuki
カルア カマアイナスの歌“土曜日の夜の星”
 2. Na Moku Eha Kealoha お玉杓子は蛙の子

3. Sail Along Silvery Moon Tobias 銀影わけて
4. Kauai Ukulele Girl Asabuki カワイのウクレレ娘
5. Vieni Vieni Scotto ヴィエニ・ヴィエニ
- II 6. Cottage in the Snow Valley Asabuki カルア カマアイナスの家
7. Weave a Lei Bright 花環を作りませう
8. Picture of Hawaii Asabuki ハワイの絵に寄す
9. Blue Hawaii Rainger ブルー ハワイ
- III 10. Tap Chimes Moke 鐘
11. Loveless Love Handy ラヴレス ラヴ
12. Lonesome Road Shilkrct 淋しい路
13. By the Waters of Minnetonka Licurance ミネトンカの湖畔にて
(休憩)

Part 2.

- IV 14. Ukulele Solo K.Harada St. Louis Blues Handy セントルイス ブルース
- V 15. By an Old Sugar Mill in Hawaii Noble ハワイの砂糖小屋
16. Na Lei O Hawaii King 島の歌
17. Home on the Range Guion 峠の我が家
18. Hawaiian Paradise Owens ハワイアン パラダイス
- VI 19. Down Where the Trade Winds Blow Owens 貿易風の吹く処
20. Kuu Ipo (My Sweetheart) Iona クウ イボウ
21. Honolulu Honey Moon Anderson ホノルル ハネームーン
23. Palace in Paradise Owens 夢の宮殿

カルア カマアイナス メンバー リスト (五十音順・括弧内は主なる受持役割)

朝吹英一 (スティール, 編曲) 朝比奈愛三 (スティール, サイド, ウクレレ) 瓜生隆信 (ウクレレ) 芝小路豊和 (独唱, サイド) 東郷安正 (ベース) 中川二郎 (スティール, ウクレレ) 中上川勝二郎 (サイド, テナー) 原田敬策 (スティール, ウクレレ)

御同好の方は何卒御遠慮なく下記へ御申出下さい。之からお始めになる方々も歓迎致します。東京市大森区雪ヶ谷七五二 (東横電鉄池上線雪ヶ谷駅下車) 朝比奈愛三方 カルア カマアイナス事務所

史料 3 カルア カマアイナス (第三回) 南海音楽の夕 (昭和16年 6月28日 (土) 午後 6時半)
PROGRAM

Part 1.

- A 1. Kalua Kamaainas Haida カルア カマアイナスの歌

2. Aloha no Hawaii Asabuki アロハのハワイ
3. Haole Hula Anderson ハオレ フラ
4. My Tane Noble マイ タネー
5. In a Little Hula Heaven Rainger フラの天国
- B 6. In the Royal Hawaiian Hotel Noble 青い小径
7. Don't Stop Loving Me Hoopii 捨てないで
8. Home on the Range Guion 峠の我が家
9. To You Sweetheart Aloha Owens いとしのアロハ
10. It Happened at Waialae Owens ワイアライの出来事
11. Let's Go for Broke Owens さあ 楽しく行かう！
(休憩)

Part 2.

- C VIBRAPHONE SOLOS E. Asabuki
12. Two Classic Pieces
 - a) Gavotte Gossec ガヴォット
 - b) 2nd Mazurka Wieniawski 第二 マヅルカ
 13. Little Stars in Hula Heaven Haida フラ天国の小星
 14. New Moon Plantation Togo 月の世界
 15. Malihini Mele Anderson マリヒニ メレ
 - D 16. I've Found a Little Grass Skirt Owens 可愛い草のスカート
 17. Bei Mir Bist Du Schön Secunda 美はしの君
 18. Pua O Ke Aloha Unknown プケ オケ アロハ
 19. I Like You Koli 貴女が好き
 - E 20. Alexander's Ragtaime Band Berlin アレキサンダース ラグタイム バンド
 21. 暁に祈る 古関裕而
 22. 陽炎もえて 朝吹英一
 23. Vieni Vieni Scotto ヴィエニ ヴィエニ

カルア カマアイナス メンバー リスト

スティールギター及編曲 ヴァイブラフォン 朝吹英一 サイド・スティールギター及ウクレレ 朝比奈愛三 ウクレレ及スティール 原田敬策 独唱及サイドギター 芝小路豊和
スティールギター及ウクレレ 中川二郎 同上 加藤健造 ベース東郷安正

皆様へ御知らせ！ 南海音楽同好会及びカルア南海音楽講習会に就て

上記の二つの会は益々発展しつつありますが、未だ御存知無い方々の為に会則及申込書を今晚当会場一階及び二階の広間中央に用意してございます 御希望の方は何卒御自由に御持ち下さい

史料4 カルア カマアイナス(第四回) 南海音楽の夕(昭和16年11月8日(土) 午後6時半)

PROGRAM

Part 1.

- A
1. Kalua Kamaainas 灰田晴彦詩・曲, 朝吹英一編 カルア カマアイナスの歌
 2. Hano Hano Hanalei Alohihea 曲, 灰田晴彦編 ハノ ハノ ハナレイ
 3. Moonlight on the Colorado King and Moll 作 コロラドの月
 4. Adieu Hawaii 原一介詩, Apollon 曲 さらば, ハワイ
- B
5. What are the Wild Waves Saying 朝比奈愛三詩 Noble 曲 波の囁き
 6. Ta-Hu-Wa-Hu-Wai Leleiohaku 作 タフワフワイ(ハワイの戦歌)
 7. Tahitian Lullaby Gilbert 詩, Fowler 曲 タヒチの子守歌
 8. Hawaiian One to Ten 朝吹英一詩, Iona 曲 ハワイの数へ唄
(休憩)

Part 2.

- C
9. The Mocking Bird Fantasia Stobbe 作 モッキング バード 幻想曲
 10. Song of the Wood-Pecker — POLKA 朝吹英一作 啄木鳥の歌—ポルカ
 11. “Carmen” Suite Bizet 作 歌劇「カルメン」組曲
 12. Royal Hawaiian Hotel — March Nainas 曲, 灰田晴彦編 ロイヤル ハワイアンホテル行進曲

Part 3.

- D
13. Rosalita — Tango Dupont 曲, Bright 編 ロザリータ タンゴ
 14. Aloha Means I Love You Noble 作 アロハの意味は?
 15. Mama E ハワイ民謡 ママ エ
 16. Tiger Rag La Rocca 曲, 村上一徳編 タイガー ラグ
- E
17. Let's Go for Broke 西條八十詩, Owens 曲 歌つて行かう!
 18. South of the Border Kennedy and Carr 作 国境の南
 19. 陽炎もえて 朝吹英一詩・曲
 20. 薫る花飾り 同上
 21. カルアの花 同上

カルア カマアイナス メムバー リスト

朝吹英一 電気ギター, 作曲・編曲 朝比奈愛三 電気ギター, サイドギター及ウクレレ
原田敬策 ウクレレ 芝小路豊和 独唱, サイドギター 東郷安正 ベース 中川二郎
電気ギター, ウクレレ 加藤健造 サイドギター, ウクレレ 牧原芳枝 独唱, ピアノ

〔「カルア カマアイマス ニュース」は、レコードと楽譜の発売目録及び同好会の募集のみなので省略〕

史料5 南海楽友 第五回定期公演（昭和17年6月20日（土）午後6時半）

曲目

第1部 輝く南の空（スティールギター主奏 朝吹英一）

1. 土曜日の夜の星 朝吹英一詩・曲 Op.22
2. みやまのあした 朝吹磯子〔朝吹英一の母〕詩・湊川清編
3. 星映る君の瞳 朝吹英一詩・曲 Op.26
4. 虹に咲く花 同上 Op.25

第2部 快き南の風（スティールギター主奏 村上一徳）

5. 熱風 村上一徳曲
6. タンゴ「エル チョクロ」 ヴィロルドー曲・村上一徳編
7. 夏の宵 東郷安正曲・村上一徳編
8. 南の風 東郷安正詩・曲
9. 行進曲「爽風」 村上一徳・朝吹英一共編

（休憩）

第3部 独唱（牧原芳枝，ピアノ伴奏 向坂寿美子）

10. まつよい草 朝吹磯子詩・朝吹英一曲 Op.7
11. けふもまた（高原にて）森水京子詩・朝吹英一曲 Op.8
12. 歌劇椿姫「乾杯の歌」 ヴェルディー曲

（休憩）

第4部 白銀の輝き（ヴィブラフォン主奏 朝吹英一）

13. 南海の絵に寄す 朝吹英一詩・曲 Op.24
14. 三日月の世界 朝比奈愛三詩・東郷安正曲
15. 君を呼ぶリラ 朝吹英一詩・曲 Op.33
16. 行進曲「白銀の輪」 同上 Op.35

第5部 美しき南の花（スティールギター主奏 朝吹英一）

17. 私のたからもの 谷本茂子詩・湊川清編
18. 薫る花飾り 朝吹英一詩・曲 Op.20
19. 美はしの夜花 夏島みどり詩・湊川清編
20. 愉快的な楽友 西條八十詩・湊川清編

今夕出演の楽友

朝吹英一 スティールギター，ヴィブラフォン 朝比奈愛三 マネージャー，サイドギター，ウクレレ 芝小路豊和 独唱，サイドギター 東郷安正 ベース 加藤健造

サイドギター、ウクレレ、ピアノ 牧原芳枝 独唱、ピアノ 村上一徳 スティールギター、テナーギター、ウクレレ

今夕の演奏中第2部及第4部は放送協会により当会場中継の海外放送が行われます

南海楽友ニュース

☆定期公演

南海楽友は年2回（6月及11月の予定）の定期公演を行ひますが、楽友は皆音楽以外の各自の本分に多忙なる為この定期公演の外は殆んど出演が不可能でございます。

昨年末 当方に何等の交渉も無くして「カルア カマアイナス出演」の無断広告が行はれ而も当日ステージより斯る事実とは正反対に当方の不出演に関して中傷的弁明が公表されました当方は勿論の事皆様にも少からず御迷惑の事がありました様に記憶致して居ります。

何事によらず正邪の帰結は明らかであると信じて居りますので当方は此様な事は全然問題にも致して居りませんが皆様の御迷惑を慮り今後の為此のニュースの序に斯く明言申し上げ置く次第でございます

☆コロムビアレコード吹込〔リスト略〕

☆楽譜「南海楽友愛曲譜」(旧カルア南海音楽シリーズ)

第1編 陽炎もえて 第2編 歌つて行かう 第3編 薫る花飾り 第4編 波のささやき 第5編 カルアの花 新興音楽出版社発行 著名楽器店にて販売

以下第10編迄出版手配完了の処、当局からの用紙配給許可が得られませぬ為当分出版不可能となつて居ります。許可が下り次第継続出版致します。

☆南海音楽同好会

☆カルア南海音楽講習会

上記二つの会、その他南海楽友に関する凡ての御問合せや御通信は下記事務所宛に御願申し上げます。 事務所 東京市大森区雪ヶ谷752 朝比奈愛三方

史料6 南海楽友 カルア カマアイナス 第六回定期公演(昭和17年11月14日(土)午後6時半)

曲目 演奏開始 6時45分

第一部(スティールギター主奏 朝吹英一)

1. 南海楽友愛曲集 朝吹英一編
2. 月の光(インドネシア民謡) 高津トシ詩・編
3. カルアの花 朝吹英一詩・曲 Op.30
- ★4. ヴィエニ ヴィエニ スコット曲

第二部(スティールギター主奏 村上一徳)

5. 行進曲「銀翼」 小泉昭子詩・村上一徳曲
6. 原始林 村上一徳曲
7. 若き南の国ジャワよ 村上一徳詩・曲
- ★8. 熱風 村上一徳曲

(休憩)

第三部 (ヴィブラフォン主奏 朝吹英一)

★9. 浜辺の歌 成田為三曲・朝吹英一編 10. 薔薇のタンゴ 朝比奈愛三詩・ボテロ曲

★11. 君を呼ぶリラ 朝吹英一詩・曲 Op.33 ★12. 白銀の輪 同左 Op.35

第四部 (スティールギター主奏 朝吹英一)

★13. 陽炎もえて 朝吹英一詩・曲 Op.28 14. 思ひ出の宵 夏島みどり詩・湊川清編

★15. 祭 柳重徳詩・朝吹英一曲 Op.37

★16. くちなしの花垣 谷本茂子詩・朝吹英一曲 Op.38

17. 懐しのふるさと 夏島みどり詩・湊川清編

第五部 (ヴィブラフォン・スティールギター二重奏 朝吹英一・村上一徳)

18. タヒチの歌 谷本茂子詩・湊川清編 19. 谷間の小百合 東郷安正詩・曲

★20. タンゴ「エル チョクロ」 ヴィロルド曲・村上一徳編

★21. 南の風 野村俊夫詩・東郷安正曲 ★22. 楽友の家 朝吹英一詩・曲 Op.23

演奏終了 9 時

今夕出演の楽友

朝吹英一 スティールギター, ヴィブラフォン 朝比奈愛三 マネージャー, サイドギター,
ウクレレ 田中健〔原田敬策〕 ウクレレ 芝幸二〔芝小路豊和〕 独唱, サイドギター
東郷安正 ベース 加藤健造 ウクレレ, サイドギター, ピアノ 牧原芳枝 独唱, ピアノ
村上一徳 スティールギター

★印 コロムビアレコード吹込, 詳細は右頁「南海楽友ニュース」を御覧下さい

南海楽友ニュース

☆定期公演

南海楽友 (カルア・カマアイナス) は年 2 回 (毎年 6 月頃及 11 月頃) 定期公演を行ひます。
但楽友は皆、音楽以外の各自の本分に多忙の為、この定期公演の外は殆んど出演を致しません。
尚放送協会の御依頼により、時々海外放送も致して居ります。

☆コロムビアレコード吹込〔リスト略, ただし、カルア以外の朝吹独奏盤 2 種, 「近日発売」
の洋盤「タンゴ, エルチョコロ 熱風」含む〕

今後、従来の邦楽盤のみならず洋楽盤にも大いに活躍致す事となりました。何卒後続の新盤
を御期待下さい。

☆楽譜「南海楽友愛曲譜」(旧カルア南海音楽シリーズ)

新興音楽出版社発行, ギター, ウクレレ, コード及びハーモニカ譜付の本楽譜は著名楽器店
にて販売して居ります。現在第 12 編迄出版致しました。以下, レコード吹込曲を主として
続編を出版致します。何卒御愛用下さい。番号及曲名に就ては裏面のリストを御参照下さい。

〔リスト略〕

☆南海音楽同好会 御同好の方はどなたでも御入会出来ます

☆カルア南海音楽講習会 講習科目 ギター, ウクレレ其他

南海楽友を中心とする上記の二つの会, その他当楽団に関する凡ての御問合せや御通信は下記事務所宛に御願申し上げます。

南海楽友事務所 東京市大森区雪ヶ谷752 朝比奈愛三方

史料7 撃ちてしまむ 南方共栄圏大音楽会(昭和18年3月16日(火)午後7時)

後援 情報局 毎日新聞社 藤原義江歌劇団 協賛 南海楽友

主催 社団法人日本音楽文化協会国際音楽専門委員会

曲目

挨拶 日本音楽文化協会国際音楽専門委員会委員長 子爵 京極高鋭

第I部〔略〕

第II部

解説 ビルマ留学生 モン・キン氏(工業大学研究室)

『南海楽友』演奏

1. 月の光 インドネシア民謡 映画「ファティマ」より 朝吹英一編曲
2. ラサ, サヤン ジャワ民謡 佐野鋤採譜 朝吹英一編曲
3. カンボヂヤの子守唄 仏印民謡 カンボヂヤ歌謡曲集より 朝吹英一編曲
4. 大ジャングルの美しき精 ビルマ民謡 佐野鋤採譜 朝吹英一編曲
5. 夜明け インドネシア民謡 映画「ファティマ」より 朝吹英一編曲

第III部〔略〕 第IV部〔略〕

史料8 南海楽友 第七回 定期公演(昭和18年6月12日(土)午後6時半)

曲目 演奏開始6時45分

第一部

- ★1. 楽友の家 朝吹英一詩・曲
- 2. カムボヂヤの子守歌(仏印民謡) 高津トシ採譜・詩
- ★3. くちなしの花垣 谷本茂子詩・朝吹英一曲 ★4. 蛍 朝吹英一詩・曲
- ★5. 白銀の輪 朝吹英一詩・曲

第二部

- 6. 雲 益田貞信詩・曲 7. ジプシーの嘆き クレバー曲・村上一徳編
 - 8. マリア・マリ(イタリア民謡) カプア曲 ★9. 若きジャワ 村上一徳詩・曲
- (休憩)

第三部(木琴とヴィブラフォン独奏)

- ★10. 叱られて 弘田龍太郎曲
- 11. 二つのハンガリア舞曲 ブラームス曲 (イ) 第六番二長調 (ロ) 第五番ト短調

12. 二つのインドネシア歌曲 朝吹英一編 (イ) ラサ・ヤサン (佐野鋤採譜) (ロ) 夜明け (高津トシ採譜) 13. 火華 朝吹英一曲

第四部 (芝幸二愛唱曲集)

14. 浜辺の歌 林古溪詩・成田為三曲 ★15. 南海の絵に寄す 朝吹英一詩・曲
★16. 君を呼ぶリラ 朝吹英一詩・曲 ★17. 陽炎もえて 同左

第五部

★18. エル チョクロ ヴィロルド曲・村上一徳編
★19. 三日月の世界 朝比奈愛三詩・東郷安正曲 ★20. 祭 柳重徳詩・朝吹英一曲
21. ほのぼのと 柿本人麿歌・朝吹英一曲 ★22. 愉快的楽友 西條八十詩・朝吹英一曲

演奏終了 9 時

南海楽友

朝吹英一 木琴, ヴィブラフォン, スティールギター 朝比奈愛三 サイドギター, ウクレレ, マンドリン 田中健 ウクレレ 芝幸二 独唱, サイドギター 東郷安正 ベース 加藤健造 ウクレレ, サイドギター 牧原芳枝 独唱, ピアノ 村上一徳 スティールギター 中村信一 独唱, ウクレレ

★印 ニツチレコード吹込, 詳細は右頁を御覧下さい

南海楽友ニュース

☆定期公演

南海楽友は年 2 回 (毎年 6 月頃及 10 月頃) 定期公演を行ひます。

☆ニツチレコード吹込 [既発売リスト略]

近日発売新盤

若きジャワ 愉快的楽友 新編陽炎もえて 新編白銀の輪 新編三日月の世界 新編君を呼ぶリラ 蜩 南海の絵に寄す 私のたからもの

左記の新盤中 3 枚 (6 面) を組とした 南海楽友名曲選第 1 編アルバムが近く発売せられます。何卒御期待下さい。

☆楽譜「南海楽友愛曲譜」続編出版手配中。詳細は裏面御参照下さい。〔リスト略。第 14 編まで出版。あと 2 編近刊〕

☆南海音楽同好会 南海楽友を中心に。御同好の方々からなる会でどなたでも御入会出来ます。会費年一円也。定期公演その他に関し会報送付。定期公演入場券割引。

☆カルア南海音楽講習会 講習科目 ギター、ウクレレ其他。

上記の二つの会の会則。その他当楽団に関する御問合せは何卒下記事務所宛に御通信下さい。 南海楽友事務所 東京市大森区雪ヶ谷 752 朝比奈愛三方

添付資料 1 レコード録音・発売リスト (コロムビアレコード [ニツチク] 制作・発売)

出典 史料 8, CD『幻のハワイアン』解説書, コロムビアレコードの新譜月報, 『オリジナル盤による昭和の流行歌』資料編(日本コロムビア 1998年)。

凡例 数字はレコード番号。JX1205は洋楽盤, それ以外は邦楽盤。100520から楽団名が「南海楽友」となる(JX1205を除く)。「叱られて」は, 朝吹独奏だがカルアは参加せず。

100329 陽炎もえて・ヴィエニヴィエニ 1941/5/23録音, 7/20発売

100363 歌つて行かう・薫る花飾り 1941/7/16録音, 11/20発売

思ひ出のカルア・愉快なカマアイナ 1941/9/6録音, 発売中止

100520 君を呼ぶリラ・三日月の世界 1942/3/30録音, 7/20発売

100578 楽友の家・白銀の輪 1942/6/25録音, 9/20発売

100618 くちなしの花垣・南の風 1942/9/25録音, 12/20発売

100648 (叱られて)・浜辺の歌 1942/10/3録音, 1943/1/20発売

JX1205 エルチョコクロ・熱風 1942/9/21録音, 1943/1/20発売

蛍・私のたからもの 1942/12/21録音, 発売中止

南海の絵に寄す 1943/2録音, 発売中止

100786 愉快的楽友・三日月の世界 1943/4/17録音, 1943/10/20発売

添付資料2 楽譜出版リスト(新興音楽出版社刊)

出典 東郷正昭氏所蔵史料のPDF版。

凡例 年月日は奥付記載の発行日。順番は史料8の発売リストに準じた。すべてオリジナル曲で, 内容は, コードネームと歌詞付きの五線譜, ハーモニカ譜, 歌詞, 「南海楽友愛曲譜」の広告。奥付に⑥～⑧は各1500部, ⑨以下は各1000部発行と記載あり。

①陽炎もえて ②歌つて行かう ③薫る花飾り(以上, 1941/11/5) ④波のささやき ⑤カルアの花(以上, 1942/3/5) ⑥南海の絵に寄す ⑦三日月の世界 ⑧君を呼ぶリラ(以上, 1942/9/15) ⑨白銀の輪 ⑩楽友の家(以上, 1942/10/10) ⑪祭 ⑫まつよひ草(以上, 1942/9/15) ⑬南の風 ⑭くちなしの花垣(以上, 1943/3/10)

注

- 1) 当時においては, 軽音楽という言葉は, ジャズやハワイアン音楽の他, タンゴや, クラシック音楽でも有名な小曲(通俗名曲)も含まれていた(参考, 細川周平「西洋音楽の日本化・大衆化」50, 『ミュージック・マガジン』1993年5月号)。
- 2) サンクリエイト 1985年刊。
- 3) 瀬川昌久『ジャズで踊って』増補決定版(清流出版 2005年, 初出は1983年)370頁。
- 4) 細川前掲論文40(『ミュージック・マガジン』1992年7月号)169頁。
- 5) ただし, 留意すべき文献が二つある。タキエ・スギヤマ・リブラ(竹内洋・海部優子・井上義和訳)『近代日本の上流階級』(世界思想社 2000年, 英文原著は1993年刊)128頁に, 「フィールドワークを通じて知ったことだが, 戦前, 華族の生徒の一部がハワイ音楽に関係するよう

になり、終戦後、再びその関係が復活しているのだという」とある。これは明らかにカルアのことであるが、論述はその意義づけにまでは及んでいない。早津敏彦『灰田有紀彦／勝彦 鈴懸の径』（サンクリエイト 1983年、以下『鈴懸の径』）149頁には日本の上流階層とハワイアン音楽の関わりについての考察があり、本文で紹介する。

なお、北中正和『ギターは日本の歌をどう変えたか』（平凡社 2002年）130頁に、「当時の人気アトラクション・バンド」の1つとしてカルアが出てくるが、アトラクション・バンドとは、ダンスホールの閉鎖に伴って演奏活動の場を映画上映前の余興に移っていたジャズバンドのことであり、これは誤った位置づけである。

- 6) 古川・吉原潤共編「昭和前半期の上流社会と音楽・芸能－京極典子氏・勝田美智子氏談話記録－」（『横浜市立大学論叢』人文科学系列第54巻第1, 2, 3合併号, 2003年）404～406頁。
- 7) 原田敬策『テニス 軽井沢 ハワイアン』（私家版 1997年）。国立国会図書館にある。
- 8) 『幻のハワイアン』（OMAGATOKI OMCX-1134/5, 2005年7月発売）。
- 9) 前掲北中書, 21, 60～64, 78～80頁。
- 10) 朝吹登水子『私の東京物語』（文化出版局 1998年）100, 174頁。
- 11) 前掲『日本ハワイ音楽・舞踊史』111頁。なお、以下の登場人物の経歴については、『人事興信録』（人事興信所, 1903年以後数年おきに刊行）も適宜参照している。
- 12) 前掲『鈴懸の径』151～153頁。
- 13) 前掲北中書, 68～79, 98～104, 117～124頁。
- 14) 野川香文「日本の軽音楽とハワイの音楽」（『レコード音楽』1941年7月号）33頁。野川はジャズや軽音楽専門の音楽評論家。各音楽雑誌のレコード批評・紹介欄には、少なくとも1930年代中ごろまでには軽音楽の欄が設けられ、ハワイアンのレコードがとりあげられていた。
- 15) コロムビアレコードの場合、少なくとも36年には用例があり（7月新譜「月に踊る」）、戦時下の代表的な大ヒット映画『愛染かつら』の完結編（39年11月封切）の主題歌「愛染草紙」の前奏にも使われている（コンパクトディスク『オリジナル盤による昭和の流行歌』コロムビア COCP30171～30190）。その他の用例については、細川周平「西洋音楽の日本化・大衆化」33（『ミュージック・マガジン』1993年4月号）160～161頁。
- 16) 前掲『鈴懸の径』55～149頁。
- 17) 同上, 149頁。
- 18) 前掲瀬川書, 370頁。
- 19) 「カルア・カマアイナスからサーフライダースに至る軌跡を語る」（以下「軌跡」）、原田の発言。1985（昭和60）年に日本コロムビアから出たカルアのレコードの復刻版（AX-7421）の解説書に収録された座談会で、同年1月に行われ、朝吹英一、原田敬策と芝小路豊和が参加した。中心メンバーが一堂に集まったので回想談なので非常に信憑性が高い。この史料をご提供くださった大久保利泰氏（霞会館常務理事）には厚くお礼申し上げる。
- 20) 前掲「軌跡」。
- 21) 以下、華族の経歴については、特に断らない限り、霞会館諸家資料調査委員会編『昭和修華族家系大成』上・下（吉川弘文館 1982年）による。
- 22) 前掲原田書26～27頁。
- 23) 『有島武郎・有島生馬・里見弴展』（神奈川文学振興会 1990年）9～10頁。
- 24) 注22に同じ。

- 25) 前掲「軌跡」, 芝小路と原田の発言。
- 26) 雪村いづみ(朝比奈の実娘)『愛を謳う青いカナリヤ』(婦人画報社 1987年)15, 20頁, 前掲『日本ハワイ音楽・舞踊史』111頁。朝比奈は46年に死去した(雪村書26頁)。
- 27) 前掲原田書27頁。
- 28) 前掲「軌跡」, 朝吹の発言。
- 29) 以下, 第1回公演と第2回公演のプログラムは, 東郷正昭氏(東郷安正の子息)が, ご所蔵の他のカルア関係史料と共にPDF文書の形で古川に提供されたものを利用した。正昭氏及び, 正昭氏と後出の東郷あき氏(東郷安正の伴侶)をご紹介くださった大久保利泰氏に厚くお礼申し上げます。PDF版の内訳は, 第1~4回及び第7回公演のプログラムと, 第2回公演の「曲目解説ト歌詞」, カルアの出版楽譜14点である。なお, 第1回公演のプログラムの大部分の図版が前掲原田書の表裏見返しにある。
- 30) 第1回公演のプログラム表紙に記載されている。
- 31) 前掲原田書28頁。
- 32) 前掲原田書27頁。
- 33) 当時のハワイアンの代表的な作品や著名なハワイ人演奏家の演奏は, コンパクトディスク『HISTORY OF HAWAIIAN STEEL GUITAR』(HANA OLA RECORDS HOCD34000), 『HAWAIIAN favourites』(goldies GLD25454)で聴くことができる。
- 34) コンパクトディスク『灰田晴彦・勝彦とモアナ・グリークラブ』(ビクター VICG60406)で, この作品の作曲者自身による当時の演奏を聴くことができる。
- 35) 第2回演奏会の際に配布された, 曲目の解説と英語の歌詞を載せた「曲目解説ト歌詞」が残っていることもこれを裏付けている(東郷正昭氏提供のPDF版)。
- 36) 前掲「軌跡」, 朝吹の発言。
- 37) 2007年6月5日, 尚友倶楽部(東京都千代田区霞ヶ関)における東郷きよ氏への聞き取り調査時のきよ氏の回想, 及び前掲原田書28頁, 前掲「軌跡」における朝吹の発言。
- 38) このうち, 第3~7回公演と「南方共栄圏大音楽会」のプログラムは, 日比谷公会堂所蔵の現物のコピーを利用した。本来の業務でご多忙な中, プログラム所蔵の有無を調査し, 複写, 送付してくださった, 同総務部の双川歳也氏に厚くお礼申し上げます。ただし, 第4回公演プログラムの「カルアカマアイナスニユース」は東郷正昭氏提供のPDF版による。
- 39) 前掲「軌跡」, 朝吹の発言。
- 40) 前掲「軌跡」, 朝吹の発言。
- 41) 前掲「軌跡」, 朝吹, 原田の発言。
- 42) 前掲原田書151頁。
- 43) 前掲の東郷きよ氏の回想談。
- 44) 前掲原田書150頁。ただし, 原田は, この回想でこの公演から楽団名を「南海楽友」に変えたとしているが, 実際には1年後の第5回公演からなので(史料4参照), この回想は第5回公演の話かもしれない。なお, プログラムには「愛国行進曲」はない。
- 45) 前掲原田書33頁にも, 「日本語の詞をつけられ両国語で歌う奏法をとった」とある。
- 46) 『音楽文化新聞』(41年末~43年末刊行)の演奏会告知欄や演奏会の広告を参照。
- 47) 前掲原田書156頁。
- 48) 前掲「軌跡」。

- 49) 前掲原田書150頁。同書144頁掲載の、第3回公演の際の客席を撮ったとされる写真でも、大学生風の人や身なりの良い人の多いことが確認できる。
- 50) 以下、レコード会社の月報は、国立国会図書館音楽映像資料室にある。
- 51) 注33参照。
- 52) 前掲原田書29頁。
- 53) 前掲原田書30, 151頁。
- 54) 前掲『日本ハワイ音楽・舞踊史』94～109頁。この時期までの彼の録音レコードは、前掲『幻のハワイアン』に復刻されている。
- 55) 前掲『日本ハワイ音楽・舞踊史』109頁。
- 56) 大森盛太郎『日本の洋楽』上巻(新門出版社 1986年)265～267頁。
- 57) 史料6の「南海楽友ニュース」、及び前掲原田書29頁。
- 58) 前掲『日本ハワイ音楽・舞踊史』114頁。早津は引用にあたって、かなづかいを現代かなづかいに変えているが、原文を確認することができなかったのでそのままとした。
- 59) その白熱した演奏ぶりは、前掲『幻のハワイアン』で聴くことができる。ギター音楽としては当時の最先端を行く内容といえ、戦後のロック音楽さえ予見させる。
- 60) クラシック音楽の場合、太平洋戦争開戦までは日本人演奏家によるレコードは批評界でほとんど相手にされず、ハワイアンについても、本文でふれたように日本人の演奏がハワイ人バンドの演奏と偽って発売されることが珍しくなかった(前掲『幻のハワイアン』解説)。
- 61) 堀内敬三「再び米英音楽の追放を要望する」(『音楽文化新聞』第5号, 1942年2月10日)4頁。堀内は著名な音楽評論家で、昭和初期にはジャズ曲の歌詞の邦訳をしていたこともある。
- 62) 堀内敬三「米英の楽曲を完全に潰さう」(同上第38号, 1943年2月1日)3頁。
- 63) 前掲『日本ハワイ音楽・舞踊史』114頁。
- 64) ただし、牧原のみはプロの声楽家で、コロムビアの丸家の紹介で参加した(前掲「軌跡」、朝吹の発言)。レコード制作上の多様性を増すためであったと推測できる。
- 65) 前掲『日本ハワイ音楽・舞踊史』112頁。この話の出典は明記されていないが、早津はカルアについての記述は朝吹や村上の回想によっているもので、これも同じと思われる。
- 66) 前掲「軌跡」、原田と朝吹の発言、前掲原田書29頁。
- 67) その他、加藤健造は、直前に仕事での樺太出張が決まり、中村信一も徴兵検査が入り、二人は出演できなかった(前掲『日本ハワイ音楽・舞踊史』118頁)。加藤は会社員、中村は学生であったことがこの話からわかる。
- 68) 前掲『日本ハワイ音楽・舞踊史』119～122頁、前掲原田書29～30, 151頁。
- 69) 前掲『日本ハワイ音楽・舞踊史』122頁。
- 70) 前掲「軌跡」にある朝吹の「お二人〔原田、芝小路〕が抜けたのと、朝比奈さんが軍需工場で働くということで、活動は中断」という回想と、前掲雪村書20頁の「終戦ちょっと前に、朝比奈鉄工所っていうのも自分で経営していた」という回想が手がかりとなる。
- 71) 前掲細川論文50の131頁。
- 72) 前掲『日本ハワイ音楽・舞踊史』123～129頁。

